



当プレスニュースレターでは、東京文化発信プロジェクトの多様な事業を、さまざまな切り口からご紹介しています。

平成 22 年 3 月 10 日
東京文化発信プロジェクト室
(財団法人東京都歴史文化財団)

今月のテーマ ＊ 人・体験



『東京アートポイント計画』が取り組む人材育成

「インターン・プログラム『シッカイ屋』」とは？

『東京アートポイント計画』には若い人材を育てるユニークなプログラムがあります。

“インターン・ゼミ”で講師を務めたアートコーディネーターの帆足亜紀さんと『東京アートポイント計画』エデュケーション・プランナーの石田喜美さんに、事業内容と意義を伺いました。

——まず、「インターン・プログラム『シッカイ屋』」とはどのようなものでしょうか？

石田 『東京アートポイント計画』は、東京の様々な人、まち、活動の接点である“アートポイント”を形成していこうというものです。各種のプログラムを実施していますが、そのひとつがアートポイントを自ら企画・運営できる人材を育成する「インターン・プログラム『シッカイ屋』」です。「シッカイ」（悉皆）とは、ことごとく皆、という意味。アートプロジェクトの実施に必要なあらゆる活動を受け持つプロを育てることを目的としています。具体的には、アートプロジェクトに必要な考えを学ぶ「レクチャー&ゼミ」、実際のアートプロジェクトに参加する「フィールドワーク」、アートプロジェクトの運営の仕方などを実践的に学ぶ「マネジメント」、そして参加者相互のコミュニケーションの場としての「交流&コミュニティ」の4つの柱で人材育成を行おうとしています。「レクチャー&ゼミ」には、「インターン・プログラム『シッカイ屋』」参加者だけが受講できる「インターン・ゼミ」の他、一般の方々に広く「東京」について考える機会を提供するレクチャー・シリーズ「Tokyo Art



ほ あ し あ き
帆足 亜紀

アートコーディネーター。茨城県のアーティスト・イン・レジデンス事業「アーカスプロジェクト」ディレクターの後、現在は国際交流基金のJENESYSプログラムのコーディネーションなどに携わる。

School」があります。多角的な視点から学ぶ場を提供することで、活動をはじめためのヒントを得てもらいたいと思っています。

——どんな人たちが参加していますか？

石田 昨年8月末にスタートし、

登録は現在167人。20代後半から30代が中心層で、女性が8割です。アートに関わる仕事をめざす人のほか、まちづくり、建築、あるいは社会システムそのものに興味を持つ人も多数です。

——第1回目のインターン・ゼミで講師を務めたのが帆足さんでした。どんな内容でしたか？

帆足 参加者には事前に、私が手がけたことのある茨城県

でのプロジェクトについて調べてもらい、ゼミは各自の発表、講義、ディスカッションという形で進めました。将来を具体的に考えている人、イメージだけの人と様々でしたが、皆非常に熱心。何かをやりたいという強い意欲を感じました。

——こうした学びの場所が求められていた？

帆足 皆、やりたいことがあっても社会の中でどう実現したらいいかわからないんですね。私自身、アートの仕事を始める前は、まず実践している人の話を聞きに行ったものです。実際の経験を聞くことには大きな意味があります。

石田 これまで東京では、レクチャーはあっても、将来を担う人材をきちんと育てていく場が少なかったのではないかと感じています。インターン・ゼミでは初回が帆足さんの実践例、その後も企業へのプレゼン方法、アートに関わる法律や経済、地域資源のリサーチなど、具体的なテーマを通して参加者がスキルを身につけられるよう支援しています。



い し だ き み
石田 喜美

『東京アートポイント計画』
エデュケーション・プランナー
東京文化発信プロジェクト室
地域文化交流推進担当



プロの視点を持った担い手を育てていきたい

——地域でのアートプロジェクトに関わりたい人たちが多くなっているようですが。

帆足 日本ではアートによる文化発信、地域おこしといったことは地方からさかんになりました。東京には意外と、そういう活動も少ないんです。しかしアートマネジメントをやりたい人は確実に増えています。マネジメントというとわかりにくいですが、ファンドマネジメントと考え方は同じです。つまり、預かった資産の価値を変えていくということ。例えば、単に空いている店舗スペースを使って何かするというのではなく、店舗という資産を預かり、地域の価値を変える。地域の中でこれまで出会うことのなかった人同士の交流がはじまったり、これまで地域になかったサービスが提供されるようになったり。そうした理念をしっかりと身につけて欲しいですね。また、アーティストや地域の人をつなげていく役割も担わなければなりません。そうした、あらゆる面でのプロの目が必要です。

石田 東京はモノも情報もあふれています。何かに主体的に関わろうとしても、いつの間にか消費のプロセスに巻き込まれてしまう。だからこそ、自ら創造し発信する立場に立ってみたいと考える若い人が多くなったのでは。広い東京では地域によって文脈も多様でしょうけれど、プロとしての基本的な力をつけることは大切です。でなければ、アートプロジェクトを地域に根付かせることもできません。

——これまで事業を進めてきて、参加者の反応は？

石田 最初の頃は抽象的な議論も多かったのですが、今は社会性を持った企画立案ができるレベルになってきました。写真展や地域のミニ映画館など、アートプロジェクトを実践しはじめた人もいます。故郷に戻ってアートプロジェク

トを立ち上げたいという人も大勢。こうして東京だけでなく、全国に『シッカイ屋』出身者によるアートポイントが展開されていくといいですね。

帆足 多数の点が面になれば、地域の中に普通にアートがある状況が受け入れられやすくなります。アートが身近な社会とは、想像力と創造力を尊重する社会ということなんです。

——今後はどのような計画がありますか？

石田 今、アートプロジェクトのスターターズテキストを作ろうと進めています。帆足さんがプロとしてやってこられた中で見出されたノウハウのうち、普遍的なことがらを文書化しようという試みです。

帆足 経験から学ぶことは大切ですが、“わからない”ために準備段階で無駄な時間を費やしてしまい、アートプロジェクトの成果に結びつかない、あるいは、本来の価値を引き出せないという状況を避けたい。いわば民間企業の研修テキストのようなものが必要だと痛感します。また、地域の人とコミュニティがあって、そこにアートをつなげていくという中では、アートプロジェクトの企画・運営に直接関わるという方法以外にも様々な関わり方があります。この「インターン・プログラム『シッカイ屋』」を通して、参加者には何ができるのかじっくり見極めていって欲しいですね。



人と社会のなかでこそ生きる芸術文化の力

現代の芸術文化は、社会の中で人々に見られたり受け入れられたりすることなしには完結しません。アーティストと人びとの多面的な関わりによって、アートがより身近なものになり、わたしたちの観賞力も研ぎ澄まされます。実際、アートを日常文化として位置づけ、市民との接点をもった取り組みが多く出てきています。

このようなアート活動の拠点となる「場」づくりや、多様なアートを紹介する機会の提供には、NPO・企業・行政等の協働が成果をあげることが少なくありません。さらに、アートを身近にする仕組みづくりができる人材の育成にも、もっと力をいれたいところです。今まで住民にたんなる「ハコ」だとみられていたある劇場が、担当者が代わることにより、地域との関係を発展させた例があります。そうした優れた人材は一朝一夕には育ちません。そこで行政に求められることは、単発の資金に限定されない息の長い支援です。

芸術文化は、お金や時間をかければすぐに効果や見返りを得られ

るという狭義の経済効率では測りにくい世界ですが、実は中長期の社会的効率という点ではかなり有効なのです。

今日、人間と社会にとって本当に大事なものは何なのかということが問われる時代になりました。日常にアートの「場」がありそれを皆が共有する社会というのは、安定した、心豊かな世界です。アーティストには、あらゆる空間をアーティストティックなものにするという意気込みで活動してほしいですね。

なかむら よういち
中村 陽一

立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授、社会デザイン研究所副所長。NPO サポートセンター理事、市民社会創造ファンド運営委員。コミュニティや地域ネットワークの問題に詳しく、パブリックシアターの講座等でも教鞭をとる。





『六本木アートナイト 2010』 実行委員長に聞く

六本木の街にアートで“驚き”と“感動”を

六本木の街を舞台にした一夜限りのアートの饗宴『六本木アートナイト2010』。
森美術館館長で、同イベントの実行委員長である南條史生さんに、
開催に向けての意気込み、またアートナイトの楽しみ方について伺いました。



なんじょうふみ お
南條 史生
六本木アートナイト実行委員長
森美術館館長

東京・六本木という“街の見る夢”は？

——『六本木アートナイト』は、基本理念に「アートを通じた非日常的な体験」を掲げていらっしゃいますね。

南條 ある人の言葉に「驚きのないところに感動はない」というものがあります。アートというのは、非日常的な何かを見て“驚く”ことが入り口になります。それは大きいとか美しいとかだけではなく、非常に静かであったり不思議であったり——さまざまな驚きがあるでしょう。そこから「これって何だろう」と興味を持ち、作品と向き合うなかで、「こういうモノの見方があるんだ」と心を動かされる。それが“感動”につながっていきます。

アートを街の中に置くことで、ふだん見なれている街が違ったものに変貌し、新しい世界が見えてくる。そうした体験が“街の見る夢”ではないでしょうか。

——純粋な「驚き」は、人を元気にしてくれますね。

南條 それも大きな狙いなのです。今の日本で、「ここだけは元気だ」というものが一つくらいあってもいいじゃないですか（笑）。いつの時代にも、どんな社会にあっても、アーティストは自分の心のままに作品を生み出していきます。そうした彼らの創作意欲から、新しいビジョン、前向きなパッションを感じ取って欲しいのです。

今回の参加アーティストは、椿 昇などベテラン勢だけでなく、若い人にも多くのチャンスを与えています。「こんなの初めて見る」「すごく面白い」これも感動の一つですね。街頭に置いたモニターの猫と対話ができる作品や、100円ショップのカゴというありきたりの素材をアートにした作品などは、「現代美術は難しい」と思っている方にもきっと楽しんでいただけたと思います。

——**「昨年が55万人もの観客を集めたのも、「アートに元気をもらいたい」という人がそれだけ多くいたという**

証拠ではないでしょうか。

南條 実は『アートナイト』には二つの仕掛けがあります。一つはちょう

ど冬が終わり、桜がほころぶ時期にぶつけていること。そろそろ家の中に閉じこもっているのにも飽きた頃、「外へ出ていいんですよ」と。しかも「夜通し遊びましょう」という魅力的なお誘いですから（笑）。

二つ目には、今年はオールナイトで開館する美術館が2館あり、街中でのプロジェクトでは前回よりも多くの作品が配置され、六本木の街全体がアートで皆さんを歓迎する雰囲気になっています。

——**オールナイトで開催する意味とは？**

南條 メイン会場の一つである森美術館は、通常夜10時まで^{*}開館し、来館者のピークのひとつが夜7時という国内では珍しい美術館です。仕事を終えてから、食事の前後にアートを楽しむという新しいライフスタイルが多くの方に受け入れられている。また六本木はオフィス街であると同時に、ナイトライフが充実した街でもあります。アートを見てまわり、合間に食事をしたりお酒を飲めるというのも大きな魅力でしょう。『六本木アートナイト』は、ふだん六本木を訪れない人も、また仕事や買い物で決まったエリアしか知らない人も、今までとは違う街を発見できるでしょう。六本木はこういう街だったのかという「驚き」、それが「感動」に変わる。

その感動を僕はぜひ、東京から世界中の人に発信したいのです。伝統文化や最新技術というだけでなく、不思議で、楽しくて、魅力的な街。「桜が咲く頃に東京へ行くと驚くよ。楽しいよ」と世界中の人が言ってくれるような催しに育っていった欲しい。それだけのポテンシャルを『六本木アートナイト』は秘めていると思います。

※火曜日は17:00まで



椿 昇/
新作《ビフロア・フラワー》
イメージ

『六本木アートナイト 2010』

日時／3月27日（土）10:00～28日（日）18:00

コアタイムは27日の17:58（日没）から28日の5:34（日の出）まで

会場／六本木ヒルズ、森美術館、東京ミッドタウン、サントリー美術館、

21_21 DESIGN SIGHT、国立新美術館、六本木商店街、

その他六本木地区の協力施設や公共スペース

詳細は<http://www.roppongiartnight.com>

EVENT A La Carte

イベントアラカルト

東京文化発信プロジェクトの事業で、今後注目のイベント、開催された公演のレポートなどを、本コーナーで紹介いたします。

注目の イベント 1

学生とアーティストによるアート交流プログラム

学生とアーティストの交流で 地域・社会にアートを発信

学生を対象に、様々な分野のアーティストとの交流・協働の機会を提供している『学生とアーティストによるアート交流プログラム』。公募で選ばれた16のプログラムが13の大学によって実施されています。

参加プログラムのうち、東京の特徴あるまちなかで海外名作戯曲を上演する『日大×藝大+mmp 戯曲をもって町へ出よう。』では、日大・建築学科の学生が上演空間を探し、東京藝大の学生が演技者に。演出はプロの演出家が担当しました。「1回目の『しあわせな日々』は江戸川河川敷で上演しました。普段は足を運ぶことも少ないであろう場所で、観客に演劇だけでなく、東京の風景も楽しんでもらうのが目的でした。突飛なアイデアも演出家が受けとめてくれましたので、学生はのびのび取り組めたと思います」と、日大理工学部建築学科・佐藤慎也先生。

3月14日には参加大学の学生によるプログラムの成果報告会が行われます。



「しあわせな日々 演出：中野成樹」
撮影：山本尚明

『学生とアーティストによる
アート交流プログラム』成果報告会
開催日／3月14日（日）
13時30分開始
場所／学習院女子大学
やわらぎホール

キッズ伝統芸能体験 発表会

一から始めたお稽古の集大成。 ついにひのき舞台で初披露！

能楽・日本舞踊・箏曲・長唄三味線を、8ヶ月にわたりプロが直接指導する『キッズ伝統芸能体験』。昨年の夏から始まった各クラスのお稽古も、3月に行われる発表会でついにフィナーレを迎えます。はじめの頃は、講師の指導に見よう見まねだった子供たちも、今ではお稽古中の正座を苦ともしない様子。狂言のせりふ回しや楽器の構えもしっかりと“らしく”なっており、上達ぶりがうかがい知れます。

合計21回のお稽古の成果を披露する発表会は、各ジャンルの有名曲を中心にラインナップ。箏曲では『キッズ伝統芸能体験』オリジナル曲の演奏も。また、講師を中心としたプロによる公演も行われるなど、見どころが盛りだくさん。子供たちの渾身のパフォーマンスにぜひご期待ください。



能楽

開催日／3月22日（月・祝）

第1部：10時開演

第2部：13時30分開演

場所／宝生能楽堂

長唄・箏曲・日本舞踊

開催日／3月29日（月）15時開演

場所／国立劇場大劇場

注目の イベント 3

Trans-Cool TOKYO
Contemporary Japanese Art
from MOT Collection

世界に向けて、アジアの ポップカルチャーをアピール

東京文化発信プロジェクトの一環として、タイのバンコク芸術文化センターでアート・プログラムを開催しています。『Trans-Cool TOKYO Contemporary Japanese Art from MOT Collection』と題した本展は、東京都現代美術館（MOT）の4,000点にのぼる収蔵作品（MOTコレクション）より、80～90年代から活躍する日本のアーティストの作品を中心に展示。

日本のポップアートの先駆者ともいえる草間彌生、自画像をロールプレイし独自の作品を生み出してきた森村泰昌を始め、村上隆、奈良美智、それ以降、90年代に発表を始めた若手作家らの作品など44点を紹介しています。

東京を一つの発信地として、世界に向けてアジアのポップカル



NAWA Kohei
PixCell-Deer#17, 2008-9

チャーを提案。新しいCool（かつこよさ、洗練）を発信していきます。

開催日／～3月28日（日）

会場／バンコク芸術文化センター（タイ国）

主な出品作家／草間彌生、森村泰昌、村上隆、奈良美智、加藤美佳、八谷和彦、島袋道浩、田中功起、伊藤存、名和晃平、村瀬恭子、荒神明香、足立喜一郎、高木正勝など

体験 レポート

東京文化会館
青少年のための舞台芸術体験プログラム

本番さながらのゲネプロで 一流の舞台芸術を間近に鑑賞

オペラやバレエ、オーケストラといった舞台芸術に関心のある青少年や、その道を志す若い世代に、国内外トップレベルの舞台に触れる機会を提供している『青少年のための舞台芸術体験プログラム』。同プログラムでは、東京文化会館で開催される公演のゲネプロ（最終リハーサル）を平成21年度から公開。公演の主催者の協力のもと、ミラノ・スカラ座やパリ・オペラ座バレエ団、東京都交響楽団など約10団体の公開を行いました。「若い方にはいろいろな舞台を観て自分に合うものを見つけてほしい」と、東京文化会館の担当者・里神大輔さん。

2月25日に行われた東京バレエ団『シルヴィア』のゲネプロには、高校生、大学生を中心に約130人が参加。『シルヴィア』の作品解説を受けた後、大ホールでゲネプロを鑑賞しました。演



出家など関係者が見守り、本番さながらの緊張感が漂います。ダンサーの熱気が直に感じられる舞台に、参加者も真剣に見入っていました。

ゲネプロ鑑賞前のレクチャー風景。

3月 主な事業スケジュール

東京ならではの芸術文化の創造・発信	芸術文化を通じた子供たちの育成
井上雄彦 エントランス・スペース・プロジェクト ～28日(日) 東京都現代美術館 エントランス Trans-Cool TOKYO Contemporary Japanese Art from MOT Collection ～28日(日) パンコク芸術文化センター(タイ国) 芸術監督セレクション ～31日(水)「農業少女」東京芸術劇場 学生とアーティストによるアート交流プログラム成果報告会 14日(日) 参加プロジェクト報告&シンポジウム 学習院女子大学 やわらぎホール 学生とアーティストによるアート交流プログラム 14日(日)～28日(日) 東京藝術大学「千代田区秋葉原地域における全国芸術系学生交流拠点形成事業『学生メディアセンター ないろチャンネル』展覧会」／アーツ千代田3331 ～20日(土) 女子美術大学「who you know? who knows you?」 art & river bank 20日(土)～21日(日) 日本大学×東京藝術大学+mmp 「戯曲をもって町へ出よう。」 27日(土) 東京造形大学「アートと饗宴」プロジェクト シンポジウム『シカゴ〜別府 一変革期の都市へのデザインアクション』 アサヒアートスクエア 六本木アートナイト 2010 27日(土)～28日(日) 六本木ヒルズ、森美術館、東京ミッドタウン、サントリー美術館、21_21 DESIGN SIGHT、国立新美術館、六本木商店街、その他六本木地区の協力施設や公共スペース	Meet the Kids 13日(土)、14日(日)、20日(土)、21日(日)、22日(月・祝)、25日(木)、28日(日)「集まれ!池袋 みんなの大道芸」 東京芸術劇場 アトリウム前広場 青少年のための舞台芸術体験プログラム 17日(水) パリ・オペラ座バレエ団「ジゼル」ゲネプロ公開 東京文化会館 Meet the Kids 20日(土) 造形ワークショップ「葉といっしょに、わらわらあそび」 東京芸術劇場 地下1階ロワー広場 Meet the Kids 22日(月・祝) ライブパフォーマンス&ワークショップ 『描き合いつて「音と落書き」』／東京芸術劇場 アトリウム前広場 キッズ伝統芸能体験 22日(月・祝) 発表会〔能楽〕／宝生能楽堂 Meet the Kids 27日(土)「おおたか静流キッズコンサート」／東京芸術劇場 アトリウム キッズ伝統芸能体験 29日(月) 発表会〔長唄／箏曲／日本舞踊〕 国立劇場大劇場 パフォーマンスキッズ・トーキョー in 保谷こもれびホール 30日(火) 発表公演／保谷こもれびホール 小ホール

東京アートポイント計画 <http://www.bh-project.jp/artpoint>

東京アートポイント計画とは

東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指しています。まちなかで市民とアーティストが協働するアートプログラム、川や防災などをテーマとしたプログラム、アートで人・まち・活動を結ぶための人材育成プログラムなどを展開しています。

アートプログラム

LIFE ON BOARD TOKYO 09-10

13日(土) 江戸の水迷宮 古川・麻布十番・浜離宮・極小水路クルーズ
浜離宮(中央区)周辺のエリアを親水性の高い40人乗りのZENFLEET船と手こぎ舟「E-BOAT」で巡ります。

22日(月・祝) BO菜 ボートと野菜が東京を救う／夢の島マリーナなど

TERATOTERA

JR中央線高円寺～吉祥寺駅区間を中心とした地域で活動を行う各アートのスポットのディレクターによるトークイベントやワークショップ

21日(日)

TERATOTERAお披露目の日

地域で活動を展開するアートの関係者やアーティストによるトークショー
やライブパフォーマンス／CAFE ZENON

Insideout / Tokyo Project

東京と地域を結ぶ活動を行っている団体による、「東京一地域」の関係の再構築をめざした活動紹介資料の展示や、公開プレゼンテーション・ディスカッションなど。
／アーツ千代田3331 コミュニティ・スペース1

14日(日)～31日(水) 活動紹介資料の展示

20日(土) 開会式・交流パーティ ゲスト:森司(東京アートポイント計画ディレクター)

21日(日) 公開プレゼンテーション「各地域での活動報告～今後の展望」
ゲスト:野口玲一(文化庁芸術文化調査官)

22日(月・祝) ラウンドテーブル式ディスカッション

「Insideout～二拠点の交流から生まれるもの」
ゲスト:熊倉敬聡(慶應義塾大学理工学部教授)

人材育成プログラム

レクチャー・シリーズ「Tokyo Art School」

13日(土)「テクノロジー・情報・身体」

藤高 晃右(Tokyo Art Beat・NY Art Beat共同設立者)×

ドミニク・チェン(NPO法人クリエイティブ・コモンズ・ジャパン理事)／

株式会社ディヴィデュアル共同設立取締役)

／アーツ千代田3331 体育館

インターン・プログラム「シッカイ屋」

27日(土)「シッカイ屋」ネットワークミーティング(仮称)

インターン・プログラム「シッカイ屋」参加者によって企画された車座トークや、ポスター形式による活動の公開プレゼンテーション

／アーツ千代田3331 TOKYO ARTPOINT PROJECT ROOM 302

■ 東京文化発信プロジェクト 概要 ■

東京文化発信プロジェクトは、東京ならではの芸術文化の創造・発信と、芸術文化を通じた子供たちの育成を目的として、東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体、アートNPO等と協力して実施しているプロジェクトです。

演劇、音楽、伝統芸能、美術など様々な分野のイベントやフェスティバル、まちなかで市民とアーティストが協働するアートプログラム、まちとアートをつなぐ人材の育成事業、子供向けの体験型プログラムなどの事業を展開しています。

東京は、世界に通用する日本の伝統文化である浮世絵や歌舞伎などをはぐくみ、今も身近に実体験できる都市です。また近年では、様々なアーティストたちによる文化芸術の創造拠点になっているほか、アニメーションに代表されるポップカルチャーを次々と世界へ送り出しています。

アーティストと市民による創造的な活動とその成果の発信を通じて、東京が「文化芸術創造都市」であることを、国内だけでなく世界に強くアピールしていきます。

実施運営の統括は、財団法人東京都歴史文化財団の東京文化発信プロジェクト室が行っています。

東京文化発信プロジェクトは、東京都の「10年後の東京～東京が変わる～」(平成18年度策定)への実行プログラムとして改定された「『10年後の東京』への実行プログラム2010」(平成22年1月策定)における、目標6「都市の魅力や産業力で東京のプレゼンスを確立する」、施策18「東京の魅力・東京の文化を世界に発信」で、重点的に実施されています。

報道関係の方々へ

「東京文化発信プロジェクト広報事務局」を開設しました。
さまざまな切り口のプレスニュースレターを発行し、
プロジェクトや各事業について情報提供をさせていただきます。
お気軽にお問合せいただきたく、よろしくお願いいたします。

<報道関係者からの問い合わせ先>

東京文化発信プロジェクト広報事務局 富樫／大原
電話：03-3818-2465 FAX：03-5689-0455
E-mail:tokyobunka@prinfo.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-24-8-11F

※プレスニュースレターは、下記からダウンロードすることができます。
<http://www.bh-project.jp/festival/jpn/pressnews/>